



TITLE:

静脩 Vol. 6 No. 4 (1969.11) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 6 No. 4 (1969.11) [全文]. 静脩 1969, 6(4)

ISSUE DATE:

1969-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65933>

RIGHT:



社会科学総合図書館の提案

村 松 岐 夫

「人が建物をつくる。然る後は、建物が人をつくる。」(W・チャーチル) 私の提案は、まず千坪ほどの土地の確保とそこに七階建の建物をつくることから始まる。この建物には社会科学系の全学科に関係する資料(統計、調査報告など)・書物・雑誌が保管される。この図書館の位置は地理的に大学の中心にあるのがよい。二階から六階の間は、政治学が二階、社会学が三階、というように図書分類に応じた書物の収蔵がなされるであろう。一階には、各専門分野の講義と平行して学部学生が勉強すべき基本図書が毎学年教師により選択されて収蔵される。一階の書物は館外貸出の対象とはならず、場合によっては館内閲覧の時間さえ制限されるかもしれない。一定の書物は学生の利用率が高いことが予測されるし、他方書物の重複購入には予算からくる限度があるからである。七階は非常にたくさんの小部屋に分れていて、主として研究者・大学院学生の研究會その他に利用される。しかし、各専門内の研究會であれば従来の学部の建物があるわけだからそれを利用してもらうことにして、この七階の小部屋群は複数の専門にまたがる研究組織のために利用されるべきである。都市問題・国際関係・労働問題等の研究班が学内に組織されるとすれば、小部屋はそれらのための恰好の活動の場となるにちがいない。研究に必要な文献は階下から短時間でとり出されるであろう。一階から七階をつなぐのはエレベーターであって、人と書物の移動の円滑化が行なわれる。

現代の社会科学は、自然科学同様に次第に細分化されている。それは科学の進歩に伴う必然の結果ではあるが、しばしば、各専門の研究者の全体としての社会像を見失わせるという望ましくない結果ももたらしてきた。そこで、学問の総合という問題意識が各分野で成長しはじめているが、総合大学と自称する京都大学においてさえ、各分野からの研究者を新しく組織化し、学問の総合化を実現するための障害が非常に多いように思われる。学部自治の過度の主張とか講座制といった数十年前の研究教育体制が温存されているという根本問題もある。しかし、そうした制度的な問題に触れないとしても、必要な書物が地理的に分散していること、図書の利用方式が各学部毎に異なっていること等の技術的な問題が意外に大きな障害なのである。冒頭にW・チャーチルの言葉を引用したのは、物理的環境が人間の精神構造に強い影響を与えるという彼の一般論はこの大学社会にもあてはまるように思われたからである。もちろん、実はこうした七階建の社会科学総合図書館をつくるということ自体に障害となる要因が強固に存在していそうだということが問題であるのだが。(法学部助教授)

大学論研究の手引き

池 田 進

大学の内実は乏しいというのに、大学論はいま花盛りである。大体にいつて大学はその字の示す如く「大いに学ぶ」ところであって、大学とは何ぞやの論争に明け暮れていいわけではないのだが、大学とは何であり、どの方向に進み行くものかにつき深い反省をなしつつ大いに学ぶこともできるものとすれば、大学論の流行は結構至極なことかも知れない。

今日国際的に考えてみて、大学が当面している問題を列挙してみると、おおよそ以下のようなものが考えられる。すなわち、大学の社会的開放、研究・教育の単位の再構成、高等教育の多様化、産学協同の研究体制の整備、永久教育（社会教育）の分野にまでの大学機能の拡大、大量教育を行なう教養大学の拡充、研究と優秀な学生の養成を任務とする少数の限られた大学の設置、実力本位の大学教師の採用方針、大学の自治能力や学生の教育効果の確保のための大学の適正規模、学生参加の問題、運営管理の問題、大学の教育・研究の内容の改善……などであるが、これらの問題はいずれも私たちが前向きな姿勢で取り組まねばならない問題である。

その他の問題、例えば、学部を教育のための分科と研究のための院に分けること、専門分野の孤立化をふせぐための中央研究所の設置、各学科の分離孤立化の防止、研究のための大学や、研究所・大講義室・中央図書館・学寮などを中心とするキャンパス大学の設立……などの新型大学の構想、教授能力の認定の問題・教授内容の改善・学生の個別指導の推進・大学マンモス化の防止などの大学教育の改善・総合研究による全知的統合への努力、管理当局・講師・学生の関係の緊密化、学部・学科・研究所の一体化、教師と大学当局の協同、民主主義理念によるエリート育成の問題、スチューデント・パワーの問題……こうした多種多様な問題にとりまかれた大学の姿を私たちは整理して、大学問題と取り組まねばならぬのであるが、大学自体が複雑極まる巨大組織であるから、大学の批判的考察は多角的になされて総合的に解決されねばならない。

そのための入門として私たちはいかなる大学論の研究書を読まねばならないだろうか。これに答えるのが私に課せられた主要課題なのである。

先ず、以上の諸問題につき、英米の文献解題が中心ではあるが、適当な原典や一応の解決を示唆してくれる書物として、私は、この8月に東京大学出版会から出されたIDE大学研究会編の「世界の大学問題Ⅰ」をすすめたい。それから大学の成立と発展史につき概略的な知識を得るために

島田雄次郎著「ヨーロッパの大学」1964年 至文堂（図＜1—55ヨ1＞、育、養、法）

同 「ヨーロッパ大学史研究」1967年 未来社（図＜1—51ヨ1＞、養〔3部〕、育、農経、林学、倫理、基物研）

をすすめたい。日本の大学については

大久保利謙著「日本の大学」1943年 創元社（図＜1—55ニ1＞、育、農経、林学、法）

清水義弘編著「日本の高等教育」1969年 第一法規（図＜1—50キ123＞、養、育）

大学の理念のあらましを知るためには

高坂正顕著「大学の理念」1961年 創文社（図＜教官文庫＞、養、育）

を読まれるがよい。今日の複雑な大学の問題、状況を理解するために

リースマン著「大学革命」1969年 サイマル出版（図<1—55タ28>，育，経，数理工，経研，東南ア研）

を読まれるとよく，学生問題については

内山敏雄訳篇「学生と政治」1969年 慶応書房

が，各国の学生運動についてよく説明された論文を集めて編集されている。

以上，はじめて大学論を研究してみようかと思う方のために手引き書を書き上げたが，この外に汗牛充棟もただならざるほどに大学論の書物が出ているから，さらに研究の歩を進めようとする方はそれぞれにつき原典を読まれない。
（教育学部教授）

○ 大学問題新聞切抜帖

附属図書館参考掛では，朝日・毎日・京都新聞3紙の本年6月1日号より，大学問題に関する記事，論説，写真等を切抜いて，スクラップ・ブックを作ってきた。日付順に貼付けたもので，現在15冊に達し参考図書室に常置している。せいぜいのご利用をねがう。

—図書館のうごき—

昭和44年度全国図書館大会

本年度全国図書館大会は10月15日より3日間にわたり，長野市において開催せられた。その中でわれわれにもっとも関係の深い16日に信州大学教育学部で行なわれた大学部会についてのべることにする。

本年の議題は，大学図書館の相互協力並びに大学図書館の組織・管理の実際について研究討議する，となっていたが，実際には，“現下の大学改革問題と図書館の関係について”が，本部会の議題の中心となった。会議はまず官立，私立，公立の図書館を代表して，東京大学，関西学院大学，大阪市立大学の各図書館よりそれぞれ詳細な報告と意見が発表せられた。要約するといずれも現在の大学紛争にあたって，各図書館は直接的に大きい被害を受けてはいないが，大学がその根本から改革を要求せられているとき図書館も決して無縁ではない。むしろこの際こそ図書館の大学における存在意義を明確にし，大学改革の上に図書館の改革一部局図書室をも含めて一を考えねばならないということにあった。

ついで明治大学図書館より「図書館に対する学生の要求」（目下集計中）が中間報告せられた。さらに小田泰生氏による「国立国会図書館の機械化計画について」と題する報告があり，マーク・プロゼエクト，プロセツシング・インフォメーションファイルについての報告説明と国会図書館の第1期機械化についての詳細な報告があった。最後に先般東京において開催せられた日米図書館会議について，板垣一橋大学図書館長より説明がなされ，日米図書館会議について今後とも全図書館界をあげての支援と助言が強く要望せられ，短かい期日であるが有意義な会議を終了した。

国立七大学附属図書館協議会 —第43次—

本協議会は，大学附属図書館としては規模が類似している国立7大学の附属図書館が運営上共通の諸問題を協議するため設けられた組織体で，毎年7大学間の輪番制により運営されている。今次の協議会は，名古屋大学が当番となり，9月25，26日の両日，名古屋市において開催された。今回の会合は，目下，各大学共通の課題である大学改革に関連した大学図書館のあり方や，その運営，体制に関する諸問題（附属図書館商議会の性格・機能その他）が

審議の中心となった。全学的レベルによる図書館改革の検討（東大）をはじめ、現状と問題点の紹介があり、諸外国の事例や豊富な識見が図書館長等から述べられた。

図書館機械化調査研究班研究集会 一第2回一

図書館機械化調査研究班は、現代における図書館資料および学術情報の増加と利用者の要求の高度化に即応し、図書館業務の機械化を研究するため、国立大学図書館協議会の中に設置されたものであるが、10月18日、東大で第2回研究集会がもたれた。

文部省の業務機械化計画（5カ年）によれば、旧帝大、神戸、広島の9大学に高性能パンチ・カード・システム装置（PCS）を、他の66大学に簡易機械化装置（マルチ・カード・セレクター、演算装置付さん孔タイプライター）を導入するための予算が要求されている。PCSの適用業務としては、①選択・発注、②受入・支払、③学術雑誌の管理、④貸出・返却の面が考えられ、目録業務については、MARCテープの利用が考えられるので省かれている。この高性能PCSはカード・システムであるが、将来磁気テープ、磁気ディスクに置き換えられるだろう。その時点においてMARCとの接点が求められる。

東大からMARC（機械読取可能目録）テープの利用について、大学図書館として考えるべきこととして、①大学と国会図書館との緊密化、②大学間のネットワーク、③標準化の問題として目録記入、分類ならびに英書以外の図書の問題、④整理の流れ、組織、人等の内部態勢といった問題点が提起された。

このMARCに関して、国立国会図書館では10カ年計画をもって先ず洋書について、次に日本語MARCの完成を目指している。さしずめ、MARCテープの利用方法については、館自身の洋書の処理（図書選定に利用）と洋書総合目録への適用（MARCテープを利用すれば参加館に図書が入手のつど、LCカード番号を通報すれば、機械的に目録を作成できる）が考えられていることが報告された。

最後にこの研究集会の組織と今後の運営にふれ、実用グループとして、東京を中心にした関東地区、機械化委員会のある近畿地区、小樽商大を中心とした北海道地区の3地区に分けて研究し、その成果を相互に交換、検討し、次回に持ちよることになった。それとともに、簡易機械化については図書館短大、PCSについては神戸大学経営分析文献センター、一橋大、EDPSについては東大医学図書館、小樽商大で開発研究の面で協力してもらう必要があることが確認された。

経済学部図書室11月10日から利用再開

去る9月20日の「共闘派」学生による法経本館封鎖のさい、経済学部図書室の閲覧室と第一書庫が破壊の厄にあった。第一書庫は木製書架242本中の123本が根本からひき倒され、4万6千冊の図書が床などに散乱した。この中には、東京方面にはない戦前以来の貴重な単行書、重要な統計書、地方史資料等が種々ふくまれていた。

立入禁止解除後の24日、早速閲覧室の新着雑誌類、参考図書、オープン・ファイル、カード箱等の復旧を行ない、25日から書架の立て直しと散乱図書の整頓作業を、全図書系職員に事務系男子職員までくり出して開始した。それ以後、日常業務の停滞という大犠牲をはらって、この復旧作業を継続し11月10日に51日ぶりの利用を再開した。

一言・ふたこと

私達法学部学生は、学問研究を自主的にする中で、何度も図書の問題につきあたってきました。特に、ゼミで学問を追求する時、苦しい生活の中で、高価な書物を買うことも出来ない、絶版になった本は手に入らないで、自主的な従って民主的な学問分野を私達の手でやり開いていくことの困難さを痛感してきました。

特に、図書の問題が沸き上がってきたのは、レポートを作成した9月以来のことです。私達はレポートを作成する中で、本部図書館を利用したわけですが、御存知の通り、冊数が少なく、また一つの本が、数多くないという現状です。

従って私達は、これという本を手にする事が出来なかったし、その本があっても、沢山ないため、皆でその内容を深め合うという集団討論が不可能になってきました。後者の方の問題はゼロックス、

リコピーの問題とも

図書利用についての要望

関連してきたので

— 1 法学部学生より —

す。

また、私達は学部

図書室を利用しよう

と思いました。しか

しながら、この図書

室は何か学生には違和感を与えるのです。なぜなら手続きが非常に複雑で私達の手に入らないかわかりませんし、教官が借りていたら借りられないからです。また、[書庫には入れないので]、題名の知らない本をペラペラとめくって後、借りるという作業が出来ないからです。

ですから、私達は、学部図書室の本を学生がスムーズに利用できることを切望するものです。学部図書室を開放するとか、そこの本をどこかに置いて、閲覧できるようにするとか。学生の要求をくみ入れて、図書館の職員の方の労働過重にならない方向で、解決したいものです。

図書に関係している各階層で、図書問題の検討委員会をつくったと思います。

(三回生 加藤幸男)



教官文庫 (新規ご寄贈分)

「コロイド化学の基礎 (基礎化学シリーズ5)」中垣正幸 (薬学部教授), 福田清成共著 大日本図書 昭44

「水分の定量 (分析ライブラリー14)」舟阪 渡 (工学部教授), 室井 要共著 東京化学同人 昭44

「代数幾何学入門 (現代の数学9)」中野茂男 (数理解析研究所教授) 著 共立出版 昭44

「東大闘争」井上 清 (人文科学研究所教授) 著 現代評論社 昭44

「フランス文化史 I, II」デュビイ・G, マンドルー・R共著, 前川貞次郎 (文学部教授), 島田尚一共訳 人文書院 昭44

「ブレイト・ノート」野村 修 (教養部助教授) 著 晶文社 昭44

「改訂 量子化学入門 (下)」米沢貞次郎 (工学部教授) 等著 化学同人 昭44

「日本古代国家論究」上田正昭 (教養部助教授) 著 塙書房 昭44

「大仏開眼 (国民の歴史4)」上田正昭著 文英堂 昭44

「シンポジウム日本と東洋文化」上山春平 (人文科学研究所教授), 梅原 猛共編 新潮社 昭44

「定本 創造への飛躍」湯川秀樹 (基礎物理学研究所教授) 著 講談社 昭44

「六朝時代美術の研究」長広敏雄 (名誉教授) 著 美術出版社 昭44

「新編 水力学大要」藤本武助 (名誉教授) 著 養賢堂 昭44

「新修 京都叢書第2, 3, 15~16」野間光辰 (文学部教授) 編 臨川書店 昭44

「デ・サンデ天正遣欧使節記 (新異国叢書5)」泉井久之助 (名誉教授) 等訳 雄松堂 昭44

「中国の天文暦法」戴内 清 (名誉教授) 著 平凡社 昭44

(201)



工学部・教室図書室 合成化学図書室

百万辺裏門を入って左側、コの字型の建物工学部4号館（工化総合館）の1階にあり、合成化学教室事務室と一部屋を分かち合っているのが本図書室である。

昭和35年、工業化学教室より分かれて合成化学教室が創設され、次いで4年後、建物の完成に伴い教室事務室が形を整えた時、その一角を借りての図書室（図書コーナー）が発足した。この仮住まいは発足5年後の現在も続いている。蔵書冊数は約1500冊、購入雑誌数は和洋あわせて24種類、年間図書費140万円の80%はその雑誌の購入費である。

利用形態は24m²の狭いスペースに書架・閲覧机・ゼロックス等の複写機が置かれているため、騒音・閲覧者以外の人の出入りも激しく、また蔵書冊数も少ないため完全開架式をとっている。

目録体系はNDCによる分類目録を作成しつつあるが、なにぶん図書室職員は1人である上に、ほとんど教室一般事務に手をとられているのが現状で、図書業務に専心できず、利用者に迷惑をおかけしていることと思われる。今後、利用者の要望に答え一貫した蔵書構成の拡充、静かな閲覧室を備えた図書室の独立を希望する次第である。

あとがき 銀杏が散る季節となりました。さて大学問題にたいしては、すでに資料紹介欄に、その関係の単行書目録・雑誌記事索引を掲載してきましたが、今号は特に、比較教育学をご専攻になる教育学部の池田教授よりご寄稿をいただきました。決してわれわれは無関心・無気力のまますごすことはできません。深く広い視野に立って、積極的かつ真剣にとりくんでいく必要があると思います。

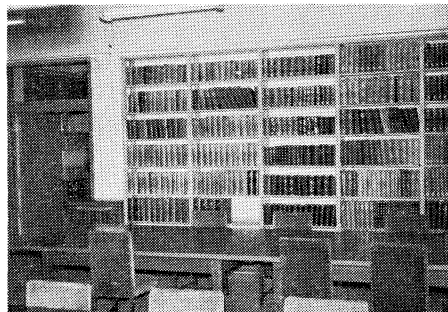
図書館（室）のことについて、どしどし「静修」にご投稿してください。

工業化学図書室

工業化学図書室は大正3年7月に設立され、以来長く赤レンガ建の旧教室の一角を占めていたが、昭和36年工化総合館（工学部4号館の一部）が完成されるに及んでその3階東北隅に移り、現在に至っている。書庫と閲覧室を合わせた総面積は約173平方米、蔵書は約14,000冊を数える。購入雑誌は和洋合わせて75種、年間図書費は昭和43年度で約314万円である。

利用形態は開架式であり、利用者は自由に書庫に出入りできる。利用者数は一日平均約100名、夏季は冷房装置が備えられている関係もあって利用者が特に増加する。職員は1名で、複写設備としてはゼロックス1台と35mmカメラ用複写台が備えられている。

当図書室は歴史も古く、化学関係の雑誌が豊富に備えられてもいるので、他教室、特に化学系教室からの利用者が極めて多く、工業化学教室の図書室というよりはむしろ工化総合館全体の中央図書室的な役割を果たしているのが特徴である。しかし、年を追って増加の一途をたどる雑誌類を収納するには、現在の床面積では明らかに不足であり、教官および学生からは、化学系5教室のための総合的な図書室を実現すべきであるとの声強い。



工業化学図書室